

令和4年度  
劇場・音楽堂等機能強化推進事業  
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)  
成果報告書

団 体 名	公益財団法人北海道演劇財団	
施 設 名	扇谷記念スタジオ・シアターZ00	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業	
内 定 額 ( 総 額 )	3,809	(千円)
	公演事業	3,809 (千円)
	人材養成事業	0 (千円)
	普及啓発事業	0 (千円)



## 2. 自己評価

### (1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p> <p>扇谷記念スタジオの運営法人である公益財団法人北海道演劇財団は、「演劇をはじめ幅広い分野における創造活動による人材育成と創造環境の充実に努めるとともに、地域文化の振興とまちづくり及び市民活動の促進をおこない、より豊かな地域社会の発展に資すること」（定款第 2 章第 3 条）を根拠に、「地方都市での優れた舞台芸術の創造とその発信を通して、演劇の振興と演劇による地域の活性化」を目的として設置されました。この目的を果たすため、扇谷記念スタジオ・シアターZ00 では、「地域の文化拠点」として「心豊かな生活を実現するための場」として「社会包摂の機能を有する基盤」として、さらに「世界への窓」「無形の文化遺産である実演芸術を守り、育てる場」として、「必要な人材の養成等を強化していく場」として、そして特に北海道において「多彩な実演芸術に触れる機会を提供する場」として公演事業に取り組んでいます。</p> <p>令和 4 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮しながらも、アフターコロナを見込み、「東京以外の他地域や、道内各地の小劇場との連携による作品の創造や流通の活性化」を目標とする 3 事業、「道外からの第一線級の専門家と協働した上質でオーソドックスな作品の創造と上演」を目標とする 1 事業、「親子で観劇できる良質な作品の創造」を目標とする 1 事業を組み立て、公演事業 5 作品すべてを実施しました。コロナ禍で難しかった国内外の優れた演劇作品を実現し、「多彩な実演芸術に触れる機会を提供する場」を提供することができました。</p> <p>一方、公演事業の目標ならびに評価指針である「創客」「集客」の面で、座席数に制限を設けたこと、人の集まる場所を避ける人々の行動変容がまだ残っていた反面、感染症対策の段階的な緩和の過程で人々が室内より屋外での活動に積極的だったこともあり、上半期の事業は目標値を達成できず、下半期に入ってから数値目標値に近づくことができましたが、入場者数の完全な回復には至りませんでした。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p>〔文化的意義〕 串田和美のひとり芝居「月夜のファウスト」（まつもと市民芸術館）、あごうさとし×能政タ介「フリー／アナウンサー」（THEATER E9 KYOTO）を通じて他地域の劇場との連携による作品の流通を図ることで相互に劇場と地域の活性化を図ることができたと考えます。また、シャンカル・ヴェンカテーシュワラン「犯罪部族法」（インド）を通じて国際交流事業を再スタートさせるとともに演出家が運営する南インド・ケーララ州の劇場との今後の交流を検討することで、地域の演劇人が世界の演劇に関心を持つ契機になりました。</p> <p>〔社会的意義〕 地域のニーズや運営法人である北海道演劇財団の理事・評議員、協賛社、後援会員などのステークホルダーの期待から、子どもと青少年を対象とした公演事業・育成事業に積極的に取り組んでいます。公演事業としては大人から子供まで楽しめる「劇のたまごシリーズ」が 7 年目を迎え、当劇場だけでなく、札幌市こどもの劇場やまびこ座とも連携して公演しました。複数会場で実施することで、市内の他劇場の活性化とともに、多くの子どもたちに演劇の面白さを伝え、未来の観客と地域の演劇を担う次世代を育成し、文化芸術による豊かな持続的な地域づくりを図れたと考えます。</p> <p>〔経済的意義〕 新型コロナウイルス感染症の影響が残るなか、地域の文化芸術ならびに劇場の活動の萎縮がまだ続いており、事業を継続することを最優先課題とし、地域の俳優やスタッフの雇用を維持し、海外を含む他地域の劇場の作品を流通させることで、文化芸術による地域経済の活性化につながれたと考えます。</p>

## (2) 有効性

### 自己評価

目標を達成したか。

扇谷記念スタジオは、短・長期的な展望に立ち、主事業となる「企画公演」、全国の創造集団やアーティストの応募に応える「提携公演」の2つの柱で全体の公演事業を組み立てています。この2つの柱と北海道演劇財団が企画する他の事業との連動で、①地域の演劇の質を高めること、②人材育成事業および普及啓発事業ともリンクし、地域の演劇振興に貢献すること、③演劇以外のジャンルの協働の場として認知されること、④中央の演劇の風を地域に吹かせることを事業の方針とし、併せて「創客」「集客」の向上を図るために有料入場者率 91.2%、収益率 44.2%を指標とし、5事業を実施しました。また、舞台と客席の距離を2メートル離す、座席の間隔を取るなどの感染症対策をとったことで、客席は定員数の80%の設定での実施となりました。

また事業終了後に、北海道演劇財団の評議員と演劇を専門とする理事5名で構成される「事業審議会」を開き、自己評価をおこないました。

事業1 Theater Park Kazuyoshi Kushida Solo Act「月夜のファウスト」有料入場者率 90.9% 収益率 47.7%

事業2 あごうさとし×能政夕介「フリー／アナウンサー」有料入場者率 29.5% 収益率 28.4%

事業3 「犯罪部族法」有料入場者率 71.4% 収益率 46.3%

事業4 劇のたまご「アラジンと魔法のランプ」有料入場者率 30.5% 収益率 33.2%

事業5 札幌座「郷愁の丘ロマンピア」有料入場者率 85.9% 収益率 40.1%

事業1、事業2、事業3は、「東京以外の他地域や、道内各地の小劇場との連携による作品の創造や流通の活性化」を目標に、まつもと市民芸術館、THEATER E9 KYOTO、京都芸術大学 studio21 で制作・公演された作品を実施し、多彩な実演芸術に触れる機会を提供するとともに、地域で演劇創造に関わる人材の刺激となりました。特に「犯罪部族法」はあまり馴染みのないインドの演劇に触れ、インド社会を鏡に日本における差別や格差を考える機会となりました。

事業4は、親子で観劇できる良質な作品の創造を通じて、質の高い演劇体験の提供を目標としました。コロナ禍で活動が委縮している子どもたちが観劇を通じてのびのびと感情表現する姿が印象的でした。また、当劇場だけでなく、札幌市こどもの劇場「やまびこ座」でも公演し、子どもたちの演劇体験の場を広げました。

事業5は、「道外からの第一線級の専門家と協働した上質でオーソドックスな作品の創造と上演」を目標に、東京を拠点に活動する山田百次（ホエイ・劇団野の上）が、かつて炭鉱で栄華を極めた北海道・夕張のダムに沈んだ町を背景に書いた「郷愁の丘ロマンピア」を公演しました。札幌座は北海道をテーマにした数々の作品に取り組んでおり、コロナ禍で遠のいていた固定客の回復につながりました。

数的指標においては、有料入場者率目標（平均）91.2%／実績 56.6%、収益率目標 44.2%／実績 39.1%と、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けていた前年度よりは若干の改善は見られましたが、今後、ミッションと目標にそった事業の明確な組み立てと、「集客（足が遠のいていた固定客）」と「創客（新たな観客）」の取り組みの強化と努力が必要です。

### (3) 効率性

#### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

計画していた公演事業5作品は、立案から公演終了まで適切な事業期間ですべて計画通りに実施できました。ただし、事業2 あごうさとし×能政夕介「フリー／アナウンサー」(6月23日～6月26日)と事業4 劇のたまご「アラジンと魔法のランプ」(5月3日～5月5日)の上半期の実施時期に関しては、3年ぶりに感染症対策が緩和され、人々の行動や活動が活性化したこともあり、集客に期待を寄せましたが、むしろ旅行や野外での活動が活性化する傾向にあり、有料入場者数・収益率ともに目標を達成できませんでした。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

事業費は、北海道演劇財団の人件費の基準と業者との相談を通じて積算をしていますが、感染対策として座席数を制限したことや有料入場者数が予算より下回り、長期化するコロナ禍で経営的な難しさもあり、支出を抑えるしかなく、各事業において助成対象経費の要望時と決算時に乖離が生じました。これは、申請書提出時に新型コロナウイルス感染症による社会状況が、観客数の完全な回復を見込むことが難しいと判断し、団体ならびに個人と協議して人件費を抑え、経費を削減し、コロナ禍でダメージを受けた経営基盤のさらなるダメージを回避したことが原因です。ただし、申請時から決算時については、事業3「犯罪部族法」のみ団体の事情により国際航空料金を対象外経費とするなど乖離はありましたが、ほぼ申請時の事業費で計画通りに進めることができました。

事業1 Theater Park Kazuyoshi Kushida Solo Act「月夜のファウスト」要望費 80.10%

事業2 あごうさとし×能政夕介「フリー／アナウンサー」要望費 71.68%

事業3 「犯罪部族法」要望費 80.06%

事業4 劇のたまご「アラジンと魔法のランプ」要望費 62.10%

事業5 札幌座「郷愁の丘ロマンピア」要望費 90.85%

## (4) 創造性

### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

平成 27 年度に芸術監督制に改編したことで、役割と目的が明確になり、地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮できる環境が整いました。また令和 4 年には、6 年間芸術監督を務めた斎藤歩（北海道演劇財団理事長）から清水友陽（劇団清水企画／北海道演劇財団理事）が就任し、プロデューサーに木村典子（北海道演劇財団専務理事）、運営者に斎藤歩（札幌座）、磯貝圭子（札幌座）、納谷真大（イレブンナイン）を配し、理事会・評議員会に諮り、運営をおこなっています。

新芸術監督の清水友陽は、地域の中堅劇団である劇団清水企画の代表であり、劇団ひまわりや小中学校でのワークショップで長く講師を務めています。

プロデューサーの木村典子は、海外での活動が長く、ダンスなどの人材とのパイプがあり、演劇以外のジャンルや海外の事業を通じて、地域の文化芸術の多様性を目指しています。

運営者の斎藤歩は、東京での活動が長く、その活動経歴と演劇関係者や劇場とのパイプから、質の高い中央の演劇を地域で実現し、人的交流を図るとともに、地域の演劇の活性化に努めています。同じく運営者の磯貝圭子は、札幌座の中心的俳優として活動するとともに、札幌市こども人形劇場「こぐま座」と札幌市こどもの劇場「やまびこ座」、高校演劇部でのワークショップで講師を務めています。運営者の納谷真大は地域の人気劇団「イレブンナイン」の代表であり、作・演出・俳優として活躍するとともに、立命館慶祥高等学校の非常勤講師を務め、中高生との演劇創造を担っています。

芸術監督、プロデューサー、運営者、それぞれの経歴や経験、個性を生かし、地域の特色と課題を把握し、地域に必要な劇場、地域から求められる劇場の在り方を模索し、事業を組み立てるとともに、こうした人材により、劇場が保有する人材、情報、ノウハウを求めて地域の人々が集まり、ここで研究され実践された舞台芸術と地域社会の在り方が発信されています。

令和 4 年度は、本来劇場が有していた国内外の他地域とのネットワークを活用し、公演事業 5 作品を組み立て、「地域に多彩な実演芸術に触れる機会を提供」を提供し、文化拠点として機能を発揮できたと考えます。

## 自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

扇谷記念スタジオ・シアターZ00では、「地域の文化拠点」として「心豊かな生活を実現するための場」として「社会包摂の機能を有する基盤」として、さらに「世界への窓」「無形の文化遺産である実演芸術を守り、育てる場」として、「必要な人材の養成等を強化していく場」として、そして特に北海道において「多彩な実演芸術に触れる機会を提供する場」として公演事業に取り組んでいます。

令和4年度は、アフターコロナを見据え、事業1 Theater Park Kazuyoshi Kushida Solo Act「月夜のファウスト」、事業2 あごうさとし×能政夕介「フリー／アナウンサー」、事業3「犯罪部族法」を通じて、「東京以外の他地域や、道内各地の小劇場との連携による作品の創造や流通の活性化」に重点を置きながら、事業4 劇のたまご「アラジンと魔法のランプ」を通じた「親子で観劇できる良質な作品の創造」、事業5 札幌座「郷愁の丘ロマンピア」を通じた「自立した演劇人の養成を行う人材養成」で、地域の演劇に刺激を与え、アフターコロナ以降の地域の演劇の活性化につながりました。

事業1～3については、地域ではあまり観劇の機会がない独自のスタイルと個性ある作品であり、地域の演劇人には刺激となり、各作品でアフタートークをおこない、観客には観劇とともに演劇を理解する場を提供することで、「地域の文化拠点」としての役割と地域の演劇振興につながったと考えます。

事業4については、当劇場での公演とともに、札幌市こどもの劇場「やまびこ座」でも公演し、子どもたちの演劇体験の場を広げ、観劇の機会を提供することで、「心豊かな生活を実現するための場」として地域の演劇振興につながりました。令和6年には札幌演劇シーズン2024-夏、そして道内巡回公演を計画しており、「親子で観劇できる良質な作品の創造」という目標も達成されたと考えます。

事業5に関しては、東京を拠点に活動する山田百次（ホエイ・劇団野の上）との協働で作品創造をおこないましたが、札幌座を中心に地域の若手俳優を起用し、創造を通じた実践的な育成を図ることで、「必要な人材の養成等を強化していく場」として地域の文化芸術の発展につながったと考えます。

## (5) 持続性

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

#### [PDCA サイクル]

計画（Plan）は、劇場を管理・運営する芸術監督、プロデューサー、運営者（3名）によって地域の特色と課題、地域に必要な劇場、地域から求められる劇場の在り方を検討するとともに、北海道演劇財団の理事・評議員、協賛社、後援会員などのステークホルダーからの社会的ニーズを把握して、劇場のミッションとビジョンにそった方針が立てられ、事業が組み立てられます。事業は理事会の承認を得て進められます。実行（Do）は、芸術監督、プロデューサー、運営者（3名）が相互協力しながら行われます。検証（Check）は、事業審議会により事業の内容と実績が評価され、この評価と外部モニターである NPO 法人札幌座くらぶ、理事会・評議員会の評価をもとに、芸術監督、プロデューサー、運営者が改善（Action）を検討し、事業計画に反映しています。

上記の PDCA サイクルに取り組むことで、組織に対する信頼を高め、持続的な発展に取り組んでいます。

#### [経営戦略]

新型コロナウイルス感染症の影響から経営基盤の安定化が課題となっています。この課題を解決するために、理事や評議員等からの寄付、ファンディング活動への協力（協賛社・後援会員の紹介と獲得）を得て、安定化を図るとともに、令和4年度からシアターZ00で制作された作品を、他の劇場や地域で公演する準備を進めています。

#### [人的戦略]

北海道演劇財団は、保有している扇谷記念スタジオに集まる人材、情報、技術を有効に活用し、持続可能な体制の構築を目指しています。令和1年に地域の中堅劇団の代表である清水友陽（劇団清水企画）、納谷真大（イレブンナイン）を理事に迎え、令和4年には清水友陽が新芸術監督に就任し、劇場運営者としての役割とともに、劇場管理やメンテナンス業務等に移行し、令和6年までに次世代の体制づくりを完了させるとともに、これ以降の体制を支える人材の発掘と育成に取り組んでいます。

#### [ネットワーク構築]

「札幌劇場連絡会」に加盟し、「TGR 札幌劇場祭」を運営するほか、「札幌演劇シーズン」や「演劇創造都市札幌プロジェクト」と連携し、地域の演劇振興に寄与しています。また、全国小劇場ネットワークに加盟し、各地の小劇場と連携することで、経験や知識を交換しながら、全国の劇場文化・演劇文化と地域社会の発展に寄与することを目指しています。